

諸変数から見る社会福祉の需給関係

The balance of the diversified social welfare

秋庭英人
Hideto AKIBA

要旨

現代の私たち日本人は、歴史的に見ても非常に特異な時代を生きている。自分たちの食糧、燃料などの大部分を他の国に依存しながら大量消費を続け、それが当然のことであるかのように完全に慢心してしまっている。確かに私たち日本人はモノを作り、売ることに 대해서는他の国とは比較にならないほどの術を身につけた。

しかし私たちはその対価を軽視し続けていた。結果的に商品は作れても、それは自分たちの生活の基礎の部分を放棄したシステムで作られたモノでしかないことに私たちは気づいたが、利益至上主義の思想にすっかり飲み込まれた私たちには、目に見えない方が幸せだったのである。

ロバート・ピンカーは様々な時代の社会体制の変化を提示しつつ、人々はどのような生活を送ったのかに焦点を当て、現代の私たちがどのような状況に置かれ、どのように振る舞うべきなのかについての緻密な文章を著している。実際のところピンカーの理論には私たちが素直に受け取るには困難なものも含まれている。

しかし私たちの生活の根源を成す社会はいかに成立しているのかについての多くの示唆は、私たちにとって重要なものであることは間違いない。

一方、徳野貞雄は『農村（ムラ）の幸せ、都会（マチ）の幸せ 家族・食・暮らし』に現代の私たちの姿を“化け物になった消費者”と著している¹⁾。生産者と消費者というカテゴリー分けが明確になるにつれてその欲求がエスカレートした私たちは、旧来の価値観から、“いかに見栄えがよく、金銭的に裕福か”と言うことを強調することに大きく変容したかを表している

今日の私たちはそのような“目に見える”自己の欲求を満たすことに傾注するあまり、自分が人間であることさえ忘れ、生命は消え去るということを隅に追いやり、いつまでも生き続ける必要がある化け物の消費者になったのである。

このような時代的背景を持ちつつ生活している自分自身の生き方と社会との関わりを、再度自分自身に問いかけてみる責任が私たちには課せられているのではないのだろうか。

本稿ではその手掛かりとしてロバート・ピンカーの『社会福祉三つのモデル 福祉原理論の探求』（注1）に著されている様々な社会政策の展開された歴史を、現代の特に私たち日本人を取り巻く環境と照らし合わせ、ピンカーの著した“諸変数”という表現²⁾から見た姿と、徳野のいう“「家族」「食」「故郷」の幸せ”について併せて考えていきたい。

キーワード： 諸変数、ヒト・モノ・カネ、ライフスタイル

I. 問題の所在

1. ソーシャルワーク本来の姿

どのように善意に解釈しても、私たち日本人を取り巻く現状を見る限り、ソーシャルワークの本来の目的を達成することは困難であると言わざるを得ない。目に見える形での“利益”が自分にもたらされなければ、そのために能動的に働く理由がないからである。

つまり自分を取り巻く環境によって受ける恩恵は当然のごとく要求することには執心するが、その恩恵は誰かが無償で与えてくれるか、何らかの対価を支払ったものでなければ“ありがたみ”は極めて薄いのである。

ソーシャルワークの究極の目標を“私たち全てが幸せにその暮らしをおくること”に置くならば、私たち日本人はその目標達成の手段を“振り分け”の結果に求めようとしている。“全ての人間が平等である”などという、青臭い理論はもはや通用してはならないのである。自分たちの存在が篩の目に最後まで引っかけられなかった異質なものであることを理解せず、篩に残された者を逆に異質あるいは弱者と見なすことで自分たちの立場を正当化することにかろうじてその意義を見いだしているに過ぎない。

さらに私たちには“無償の愛”を実感することは出来ない。しかしかつての状況から比較すれば確かに“福祉的環境”は成熟したように考えられる。様々な組織や団体、個人が積極的にボランティア活動に関わるようになったことは一定の評価に値するからである。

しかしこのような環境が醸成されつつあるのに、私たちはこのような活動にさえ何らかの見返りを求めることを決して忘れてはいない。

文部科学省が教育制度の見直しをしようとする際に、よくその内容として採り上げられるのが、児童・生徒に対する一定期間の“ボランティア活動の義務化”である。さらにそれを学習評価の対象とするならば、それはボランティアズムに基づいた行動を阻害するだけの単なるカリキュラムの見直しでしかない。児童・生徒はそのようなシステムの下で、自発性を押し殺した形で、黙々と義務を果たすだけである。さらにそれが学習評価につながるならばいかに表面的に、技術的に上手くこなすかだけを考えるであろう。

現在の社会福祉士の制度もこの延長線上にあると言えるだろう。現実に日本にソーシャルワーカーは存在しない。単に制度的にソーシャルワーカーは規定されていないからである。本来ソーシャルワーカーが担うべき役割を現在の社会福祉士に求めるのは困難である。

社会福祉士は様々な場面で指摘されるように、名称独占ではあっても業務独占ではない。つまり自分たちの仕事のエビデンスとなるものを全く持たず、現状ではただ資格を取得しただけの存在でしかない。その資格取得の成果をいかにして効果的なものにするかということには未だ考えが及ばないとも言える。

日本の福祉の現状は、どういう言葉にでも福祉”付ければそれが通用してしまう“何でも福祉”である。自分に当面の利益をもたらさない福祉にはたとえそれが後々リスクになるとしても無関心であることが現在の私たちにはもっとも肝要なのである。

私たちの自発性、無償性、ボランティアスピリットは、大きくスポイルされ、限定された部分だけを際立たせることによって砂上の楼閣を築き上げることには一応の成功した。しかし、ソーシャル

ワークの本来の目標を達成することとはその方向性が全く異なる、利益追求の一つの手段でしかなくなつたのである。

2. 疲弊する福祉

古川は『社会福祉における政策・理論』研究に寄せて』と題し³⁾、『社会福祉学の特性として、「温かい心」や「熱い心」ということがいわれます。「何とかしなければ」という熱い思いです。確かに、それが社会福祉研究の糸口になるとは思いますが、しかし、その思いをいきなり政策提言に結びつけてしまうと、それで研究といえるのかということになります。』という表現で、私たちの福祉への取り組み方を再考する必要性を訴えかけ、一種の覚醒を促す文章を著している。現場主義に徹するという表現を用いるならば非常に聞こえはいいが、都合よく感情論を逆手にとり、現場に全て丸投げしている現状では、温かい心も、熱い心も何らの意味も持たない。確かに福祉の構成要素を裏付ける明確なエビデンスを求めることは難しい作業であり、人間関係の適切な構築がなければ福祉が成立しないことは、私たちの誰もが当然のこととして認知している。

しかし現代の福祉を取り巻く環境は、そのエビデンスとなるべき様々な事象を詳細に検討する時間を私たちに与えてはくれない。目の前に山積した、解決しなければならぬ目問題を私たちはあまりにも多く抱えているのである。このような状況が長く続けば続くほど、私たちの福祉に対する原動力が精神的な概念的なものへとシフトしていくのは当然の流れであるとも言える。

現代の福祉の問題がカネで全ての問題が解決するかと言えば、そのようなことはない。しかし問題解決のためには、ヒトを動かし、モノを創り出すための財政的な裏付けもまた必要である。

高齢化が進行し、労働生産性の低下が懸念される我が国の状況では、社会保障関係に使う財源だけを聖域として扱うことは当然ながら出来ない。利益追求の原則を厳格に適用して、生産性の薄いものにはその支出を抑制するという姿勢を際立たせれば、福祉は真っ先に淘汰の対象になり、リスクが大きすぎるからである。

カネをかけずにヒトを動かし、モノを創ることを私たちは自分たちの精神性をその代償としてかろうじて維持してきた。“福祉バブル”とも呼ばれた状況を呈することになったのも、危機感にも似た私たちの心の動きが過剰に反映された結果である。

古川の問題提起は、疲弊しきつた従来の福祉に対する私たちのあり方を変容させなければ、システム全体の崩壊を来すであろうことを警告している。現に福祉に関わりたくとも、自分自身の生活が成り立たない状況では、このような労働環境で働くことに躊躇し、さらには離れていく人達が後を絶たない現状は、当然の状況であるとも言える。

ヒト・モノ・カネを福祉のエビデンスとすること自体に無理があるという議論も存在する。“金儲け”のシステムを採り入れることは、福祉本来のシステムからすれば異質なモノであるに違いない。しかしこのようなシステムをも採り入れていかなければ、裏付けを持たない感情的な政策提言が先行し、福祉の疲弊をますます増幅する結果となるだろう。

私たちに突きつけられている問題は、精神的なもの概念的なものに限定されるものではない。自分たちも社会全体のシステムによって生活している一員であるということをおぼえてはならない。常に“与え続ける存在”であることは私たちには無理なのである。「暖かい心」「熱い心」で福祉を支えることは当然必要なことである。しかし時として、自分たちを多角的に、第三者的な視点で見つめるこ

とをもしなければ、私たち自身の生活も成り立たなくなる。

II. 社会福祉の諸変数

1. 福祉のバランス

社会福祉に関する私たちのスタンスを位置付けるための作業は、これまで述べた状況からすれば非常に難しい作業であることは容易に想像できる。

しかし何らかの形で現在の福祉を取り巻く環境を自分たちみずからの手で評価しなければ、結局は元通りの他人任せの福祉に回帰することは明らかである。現代の私たちは福祉のエビデンスを様々なものに求めつつ、他者の責任に転化しようとしている。

その点ロバート・ピンカーの理論は、従来の社会福祉の思想とはかなり趣を異にするものであるといえよう。「社会福祉三つのモデル」の訳者である星野と牛津はその訳者あとがきに『ピンカー教授の専門領域は、周知のように、Social Policy and Administration（社会政策および社会運営論）であるが、教授はこの分野を広義の社会福祉の政策領域と捉えている。』と記述している⁴⁾。古川が指摘したのと同様、私たちが力説したが「温かい心」や「熱い心」だけで問題の本質を見極めようとすることは結果的に視野を狭め、「柔軟な理解を我々に迫るピンカー流の記述」とは相反する解答を生み出すことになるだろう。

このように多角的な分析をすることが欠けているとも言える私たちに、ピンカーの「社会福祉における交換の諸パターン」と題する項目では、様々な福祉モデルを採り上げつつ、社会福祉政策が進められる際には「〈深度〉〈時間〉〈距離〉の諸変数が供与と受給の質に大きく影響する。」という視点からの分析を試みることを推奨している⁵⁾。（注2）

ピンカーのこの諸変数の定義を「国民資格（nationhood）と市民資格（citizenship）」の項で著しているが、その内容を福祉の受給関係に置き換え、次のように著している⁵⁾。

「〈深度〉の変数とは、受給者が、自分の依存性や劣等感を自覚し、自分の地位を合法的なものとする裁定を受け入れる程度を指す。」とし、〈距離〉の変数を「受領者が供与者から距離的に離れていればいるほど、受給しやすくなる。」としている。そして〈時間〉の変数を「依存性を経験している期間の長さに対応する。それが長期間にわたると、個人は自分の依存的な地位に順応する性向がある。」としている。日頃このような事象を多く扱う私たちにとっては当たり前の定義とも言えるが、体感的なものを先行させ、理論形成を疎かにすることに順応してしまっているといえる。

また同時にピンカーは、その需給関係を『いつでも本来的に「与えるよりも、受け取る方が、信望が少ない」とその前項において指摘している⁶⁾。この記述に私たちは大いに関心をはらう必要がある。つまり口先で“私たちは全て平等に暮らす権利がある”と唱えたところで、その根源にある上下関係とも言える関係を排除できないことも示唆している。

私たちはこのピンカーの諸変数の考え方に基づいて、現代の私たちの福祉に対する姿勢を積極的に洗い直してみる必要があるだろう。しかし社会政策や社会運営論に基づいたグローバルな視点から私たちの福祉に対する姿勢を問い直すのでは多くの時間を要してしまうだろう。しかし様々な矛盾を内包した“福祉の姿”を見つけ出す作業は私たちにとってはさして難しい作業ではない。

私たちはその作業に基づいた“変容”を見せるだけでは何らの改善をしたことにはならない。拙速

なシステム改革を目指せば、既存のシステムと新しいシステムの齟齬が混乱を生むことは明白だからである。

2. 量と質

ロバート・ピンカーの著作は確かに多くの示唆を含む点では、私たちにとって非常に有益であることは異論を挟む余地はないだろう。しかし欧米の社会政策や歴史を背景とした内容は、自分たちの位置付けを曖昧にしている私たち日本人には容易に理解しがたい内容であるのもまた事実である。

諸変数という言葉を手軽に“数値化”という言葉と置き換えるならば、私たちは自分たちを立場を容易に位置付けることができるであろう。しかしピンカーの言う“諸変数”を数値に置き換えることは不可能である。福祉を数値化することによって生じる問題と、数値で表すことにその本質があるものとの相違があまりにも大きいからである。

その点から見れば、現代の日本の福祉のシステムは、“数値で表すことができるもの”にその力点が置かれているのが実情であろう。確かに私たちの生活は、ある程度の数値化によって評価しなければ、私たちの社会生活そのものが成立し得ない。その裏付けとなる“資源”を活用することが出来ないのである。

このような背景を踏まえあえて狭義にピンカーの諸変数を、私たち日本人の福祉を巡る考え方に当てはめていけば、様々な問題が浮き彫りになってくる。

利益追求を前提とした日本の経済システムを前提とすれば全ての社会政策の決定の最大の要因は“カネをどう配分するか”ということにその議論は行き着く。“行財政改革の一環として、支出の削減を図る”という言い回しは、政府や地方自治体が免罪符のように使う表現である。確かにカネはない。無い袖は振れないのである。利潤を生まない、拡大再生産とは相反する社会保障関係の議論が後回しにされるのは当然である。つまり予め決められた供給対して、需要の調整を図ることが最も重要な要因とされるのである。

これをピンカーのいう諸変数と照らし合わせてみれば、私たちの福祉についてのベクトルは一見プラスの方向へ動いているように見せかけて、マイナスの方へ大きく動いているということが容易に理解できる。

サービス先行型の福祉を標榜する私たちは、そのための様々なシステムを着実に造り上げてきたような錯覚に陥っている。形骸化したシステムの破綻を防ぐための対策を講じることを私たちは試みようとするが、全てに裏付けを欠く現状ではそれは容易ではない。

私たちの中には福祉に積極的にコミットしたいという人々は実は多い。“ヒト”を確保することはある面では非常に容易である。しかし過酷ともいえる労働条件の割に報酬に恵まれないという事実を知った私たちは実際にコミットすることには躊躇するのである。

さらに現在の福祉産業の環境は、そのヒトの確保を積極的に行うこと自体に積極的ではない。欲しいのは低報酬でよく働き、高い生産性のある労働者である。いかに社会福祉の重要性を全面に押し出そうとも、結局カネは使いたくないのである。カネを使わずにヒトを使い、モノを生み出すことを私たちは目指しているのである。

悪しき例を挙げるならば、私たちは当然といえば当然のこの相容れない問題を、海外からの労働力の“輸入”に頼り解決しようとする動きをも見せている。労働条件の悪さを自分たちの手を汚すこと

なくカバーしようとするのである。図らずもピンカーのいう〈距離〉の変数が、異様な形ではあるが成立する環境であるのかもしれない。実際の距離は非常に近いが、供与者と受領者の距離は決定的に遠いからである。

しかし私たちはこの試みを最終的には受け入れることは出来ないだろう。このようシステムでは、〈深度〉の変数と〈時間〉の変数に関わる部分での心の整理が出来ない。と考えるべきである。需要と供給がいかなる形であっても釣り合うならば、それは何らの問題もないと見るのもまた当然の考え方である。

しかし“量”だけ担保されれば私たちは果たして満足するであろうか。量が満たされれば当然次は“質”を求め始めるだろう。つまり依存性や劣等感をいかに払拭し、自分の地位を回復するかにその力を注ぐことだろう。

ピンカーの諸変数を社会政策や社会運営論という大きなカテゴリーを前提したものとして読み解くならば、私たちには非常に理解しやすい使いやすいものであると言える。

しかしそれを私たち一人一人に起こりうる事象に置き換えるならば、ピンカーがサブタイトルとして示した「福祉原理論の探求」という言葉が大きな意味を成してくる。

Ⅲ．生活感

1. 数値化

単に“日本は世界でも稀に見るスピードで高齢化が進行し、社会保障の充実が急務である。”と声高に叫ぶだけならば何も難しいことはない。

もはや農村をテーマとして採り上げることは流行遅れのような存在であると言えるのかもしれない。驚異的な経済発展を遂げた日本は、コンクリートやアスファルトに覆い尽くされた姿に変容し、土は“汚れ”として拭い落としてしまうのが現代の私たちの姿である。このようなカネとモノに満ちあふれた生活スタイルの中で農村の実態を論ずることは、結果的にネガティブな部分を多く導き出す結果となってしまふ。

しかし私たちの生活はヒト・モノ・カネと共に、衣・食・住の環境整備をも図らなければ日々の生活は成立しない。利益を追求することとはまた別の次元の問題である。

現代の私たち日本人の衣・食・住は、そのほとんどを海外からの輸入で賄うことで解決してきた。その比率は以前にも増して増えるようになり、特に食糧に関してはそのほとんどが輸入によって賄われる状況が続いている。

さらに人口の現象との偏りは近年さらに顕著である。「限界集落」という表現が使われるように、著しい高齢化が進行し、労働生産力が低下した現状ではもはや田畑を耕し、その収穫をもって生活するということが時代錯誤であるかのように考えられるようになった。

このような状況にあって、いわば二層に乖離したライフスタイルを維持しようとする私たちには、当然のように綻びが生じてくる。徳野の理論はそのギャップを“消費者の誕生”と表現している⁷⁾。

大量消費を前提としたライフスタイルに順応してしまったのは何も都市生活者に限ったことではない。農村地域こそ大量生産・大量消費の恩恵を最大限受けているはずなのだが、その実感は乏しい。あまりにもライフスタイルの変化の速度が速く、劇的であることが今までの生活の感覚を完全に麻痺

させてしまったのである。

しかし気づいてみると、自分たちの置かれている環境が如何に不安定になっているのか再認識させられるであろう。規制が厳しくなっても緩められることはほとんどなく、農産物の価格も下落傾向にあり、借入金ばかりが膨らんでいく状況では、もはや生産意欲を持った若年層を定住させることさえ出来ない。

徳野はこのような現状を決して否定してはいない。厳しい状況にありながらも、農村地域での生活を多くの人が続けているのもまた事実だからである。そしてそれが人間本来の生活の姿により近いと考えているからである。

そして徳野の理論を借りれば、私たちは日頃如何に自分の存在を軽んじているか、希薄化しているかということになる。“消費者”という形で一見、社会とのつながりは確保されているように考えられる。しかしその関係は一方的であり、時にはエゴイズムが先行することに私たちはすっかり馴化している。

例えば“農業”は agriculture という表現で示される。culture は一般的に“文化”と訳されようが、本来は“耕す”という意味合いをも持つ言葉である。つまり私たちは、自分たちの社会を常に“耕す”という作業をしていかねばならない。全員が社会システムの中で何らかの生産に関わる役割があるということである。しかし、私たちは何らかの形で自分たちをカテゴリー分けする必要性に囚われている。そのカテゴリー分けの最も典型的な例として、徳野は“化け物になった消費者”という表現を使っている⁸⁾。

つまり生産性を重視した現代の社会では農漁業をはじめとした産業は、数値に置き換えて考えるならば著しく低い数値しか示すことは出来ない。それと比較すれば金銭を支払って生産されたものを買う行為は、金額的にはより多くの数値として表されることになる。

このようにどこにその判断基準を置くかによって、その価値は容易に変化する。徳野はその価値を、私たちの生活の実態を検証することによって判断することを提唱している。

2. 均一化

衣・食・住のうち徳野がもっとも重要視するのが住環境である。少なくともある程度の経済成長を遂げた国では朝夕の通勤ラッシュはほとんど見られず、片道2時間を超える長距離通勤などはまずあり得ない。都心に戸建てを構えるだけの潤沢な資金を用意するか、団地住まいを覚悟すればもう少し通勤時間は短くなるが、持ち家志向の強い日本人には本来にはどちらも馴染まない。

その結果、多くの労働力が職を求めて都市を目指したが、その多くが本来は望ましい職住隣接とは大きくかけ離れた環境で生活している。膨大なエネルギーを通勤に使い、仕事をしている。異常とも言えるこのような環境で私たちが持つ人間本来の生活のパターンを維持することは困難である。自分自身の存在を他者との比較によってしか確かめられないようなほどに疲弊し、緊張を強いられている。人間関係の希薄化はもはや無関心の域にあると言っても過言ではない。その環境に順応出来なければ、ふるい落とされていく。確かに“働かざる者食うべからず”ではあるが、他者を思いやる余裕はもはや失われている。何事にも自らは手を出さない、「その他大勢」であることが最も重要なことなのである。

このことは逆に言えば、現代の福祉にとっては好都合である。“契約”を結ぶことによってサービ

ス提供をする体制を採る我が国の福祉システムはこの前提を単純に準用すればよいだけのことである。サービス提供者は均一のサービスを提供するだけで事足り、サービスを受ける側も同様に応分の負担で均一のサービスを受けることが出来る。「受領者が供与者から距離的に離れていれば離れているほど、受給しやすくなる。」という理論を持ち出すまでもなく、均一化されたサービスを提供するためには非常に有益である。

しかしこの場合の“距離”は、物理的な距離の問題ではないことも私たちは忘れてはならない。私たちの心の中にある“他者との距離”が離れていることによって成立している非常に危うい“均一”であることは誰の目にも明白である。つまりカネでヒトにモノを提供してもらうことが当たり前の環境であることにならされたしまった私たちは、それは何らかの経済的利益を生み出すものでなければならぬからである。

この均一のサービスは、サービスの供与者にとってはさらに都合のよいものである。現在の介護保険制度のよう同じ料金で、同じ作業をすることがサービスの基本となるならば、サービスの内容が“均質”であること、あるいは“均等”であることの優先順位を大きく下げることが可能になるからである。コストを徹底的に下げることが主眼とすれば、サービスの質は大きく低下する。そしてそれが当然のこととなれば、それは結果としてカネを支払っているはずの受領者に「この程度のサービスしか受けられないのか」という劣等感を植え付けられるものとなる。しかし現実的にそのサービスを受ける必要があることも事実であり、さらに現在のように高齢化が進展し、そのサービス提供が結果的に長期化したとすれば、契約によって対等な関係が結ばれたはずの供与者と受領者の間に、受領者が下流となる流れの上下関係が生じることになる。

しかしこのような需給バランスの崩れは一方的なものではないこともまた事実である。例えば近年その数を急激に増やした非常に高額な利用料が必要な有料老人ホームも、その支払った金額に見合うサービスが提供されていると利用者が判断するのであれば、それは何らの問題とはならないはずである。応分の負担が可能であるならば、その違いが受給バランスの違いに反映されることは当然である。

徳野の理論はこのような状況を具体的に解説するものではない。しかしその生活する地域によって選択の内容が異なることが当然のこととして起こりうることを示唆している。当然のように農村地域の方が現在の社会システムに照らし合わせるならば、あらゆる点で選択の余地がないように考えられよう。しかしどんなに人口が減少し、様々な制約が生じていると考えられる状況にあっても、急激な生活環境の変化を望まない、あるいは生活環境を変化させないということを選択する人々は存在するのである。

つまり一律の基準で、均一のサービスを提供することは確かに理想的なことであるが、私たちの生活様式が個々人で異なるように、選択の基準も個々人で異なるのである。いかに沢山の選択肢があっても、そのどれもが自分自身にとって最適なものではなければ、選択肢が存在しないのと同じことになる。このことが都市生活と農村生活の生違ひと言えるだろう。一見、非常に狭い範囲に限定されたような農村地域での生活という選択は、私たちの生活の全てを見渡すならば必ずしも奇異なものではないのである。ただ現代の日本では、経済的に豊かなものが衣・食・住の全てにおいて最良の選択が出来るという考え方が優勢であると言うことだけは否定できない。

しかしこのような二極化とも言える現状を闇雲に否定することは避ける必要がある。請求に結論を出すことを求めるのはいつの時代にあっても不可能であり、一定の時間を要するからである。さらに、

私たちは目先のマイナスのベクトルをもって生活に関わる選択肢を狭めることは避けなければならない。確かに経済的困窮や、健康を損なうなど、様々なマイナスの要因が私たちをいつ襲うかはわからない。しかし必ずしも見た目のマイナスが、真のマイナスのベクトルであるとは限らない。何かに、誰かに依存する体質が身に染みついたことこそ、現代の私たち、特に日本人のマイナスのベクトルの最大の要因であることを再確認しなければならない。

IV. 考察

ピンカーと徳野の理論は一見かなり異なる理論であるように思われるが、本質的には同じ問題を異なる断面から切り取ったものであると言える。

どちらかと言えばピンカーの理論はより史実的であり、システマティックである。イデオロギーを背景とした社会システムの変容は長い時間をかけなければその評価が定まらない。それを背景とした欧米中心の社会政策の理論は私たち日本人には多少受け入れがたい部分が存在するのも事実である。

現代の日本の福祉システムは欧米のシステムをベースに、我が国独特の事情を加味した形のシステムである。その点からもピンカーの掲げる諸変数の理論は、私たち日本人が見ても特段理解しがたいものではなく、むしろ非常に明快であるとも言える。

その点徳野の理論は私たちにとっては、その状況が把握しやすいこともあり解りやすいと考えることが出来る。まさに現代の日本の姿そのものを表しているからである。

しかし実際に私たちの生活を変革するとすれば、かつてのように農耕を基本とした生活に切り替える方が困難であると言えよう。すっかり他者に依存する体質になってしまっている私たちにはとても難しい課題だからである。

改めて言うまでもなく、このことは私たちの福祉との関わりについても同様である。結果的に排除の理論を先行させ、バリアの構築に腐心してきた私たちにとって、本来の意味でのソーシャルワークを実践することは非常に困難である。ソーシャルワーク自体が決して福祉に限定されるものでなく、私たちの生活の全てに関わるものであるという認識が私たちには未だ希薄である。

今回引用した理論は決して斬新な内容ではなく、むしろオーソドックスな理論であると言える。時代の変革は、様々な問題を内包しつつも、新しい価値を創造していき新たな理論を生み出すことに大きく寄与する点に関しては両者とも否定的ではなく、多少の時間を要しても必要不可欠なものであることでは一致を見ている。

しかしそのエビデンスとなりうるものは、私たちの生活を冷静に検証してこそ得られるものである。私たちとそれを取り巻く環境が如何に変化を見せようとも、人と人とのつながりは連綿と維持されていかなければならない。それを基盤としなければ私たちの生活そのものが成立し得ないものになってしまう。

このことは私たちの福祉に対するスタンスにも当然反映されなければならない。ソーシャルワーク本来の“社会全体を見渡す”という役割がいつの間にか変容し、“誰かが何とかする”現代の福祉の形態は特殊性を際だたせ、普遍的に私たちがコミットすることを困難なものにしている。利益を生み出すことが出来ないものが淘汰されるのは利益追求の論理からすれば当然のことである。

しかし数字だけでは表しきれないのが福祉の本質である。数値を目標や指標として掲げ、その達成

に努力することは決して無駄ではない。ただ、その目標や指標をニーズに即した形で変容させていくことは当然のように求められる。そのようにして生まれる様々な選択肢と選択こそまさに“変数”であり、ヒト・モノ・カネだけではない、社会全体の普遍的なシステムとして、均衡のとれた福祉の需給関係を構築することこそ、私たちが解決すべき大きな課題である。

おわりに

極論をすれば、本論は夢物語のストーリーを書き連ねたものであるのかもしれない。しかし私たちは確実に年老い、この世から去ることは間違いのない事実である。その過程が平穏なものであれば何ら問題はないが、自分自身の判断・行動だけで全ての局面を乗り切るとはもちろん不可能である。

福祉を金科玉条のごとく、上段の構えで扱う必要はない。私たちはあまりにも“目に見える福祉”に囚われているのである。Social welfareを“社会福祉”と表現することは決して否定しない。しかし福祉の本質はSocial workという言葉の方によりその重要さがあるのではないのだろうか、生活の中から自然に形成される“他者を思いやる心”をもう一度、私たちの心の内に取り戻してみたい

引用文献

- 1) 徳野貞雄 「農村の幸せ、都会の幸せ」 NHK 出版 2007年 P55
- 2) ロバート・ピンカー著 星野政明・牛津信忠 訳「社会福祉三つのモデル -福祉原理論の研究-」黎明書房 2003年 P85
- 3) 古川孝順 「社会福祉における『政策・理論』に寄せて」 社会福祉学 Vol.48-3 日本社会福祉学会 2007年 P129
- 4) ロバート・ピンカー著 星野政明・牛津信忠 訳「社会福祉三つのモデル -福祉原理論の研究-」黎明書房 2003年 p329
- 5) 同上 p85
- 6) 同上 p85
- 7) 徳野貞雄 『農村の幸せ、都会の幸せ -家族・職・暮らし-』 NHK 出版 2007年 p25
- 8) 同上 p55

参考文献

- 伊藤隆二 「人間の価値と教育についての覚え書」 横浜市立大学論叢人文科学系列第45巻2号「伊藤隆二教授退官記念号」別刷 1994年 p53-85
- 三戸祐子 「定刻発車-日本社会に刻まれた鉄道のリズム」2001年 交通新聞社

(注1) この文献は翻訳されたものであり、今回使用したものは改訳版である。ロバート・ピンカーが1979年に出版した際の原題は、The idea of Welfare であり、日本語訳の初版は1981年に磯部実監修、星野政明訳により黎明書房から出版された。ロバート・ピンカーは、1971年出版の Social Theory and Social Policy を本書の起点となった代表的な文献として挙げており、本書にも多数の引用が見られる。

(注2) 「深さ(度合い)、時間、距離という変数」という表現は、ロバート・ピンカーの日本語改訳への序(p3)にも使われているが、原著では第5章の「社会福祉における交換の諸パターン」(p85)からの引用とした。